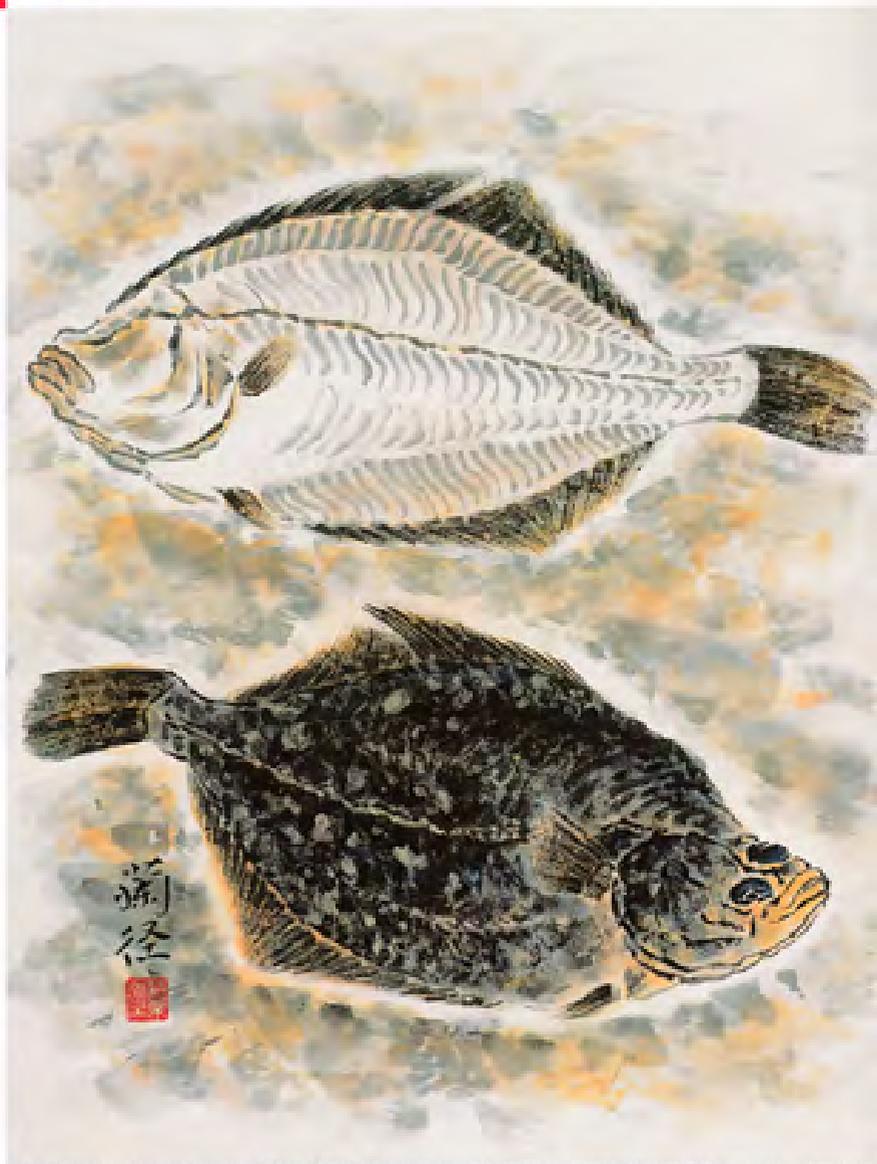


# 海

# 12

2019

船舶与轮机 (A1版)



# 滝一縷

能村 研三

草野心平記念文学館

野分立つほつれ懸かりの滝一縷

したたかな芯を包みし鶏頭花

菊月夜鏡いらずの髪を梳く

吊るされて朱の過信の唐辛子

掌中の胡桃鳴らして一事了ふ

場違ひを気づかずにをり居待月

二年ものの琥珀酒揺るる月の宵

釘打ちの腕を買はれし厄日かな

繰合す万障ばかりすいつちよん

あだしごとはさておき夜は長きかな

先日福島県のいわき市の俳句の講演に出かけた帰り、地元の方に「草野心平記念文学館」へ連れて行っていた。阿武隈山系の山々が一望できる雄大な自然に囲まれた山腹にあり、心平が生まれ育った故郷の風景の中に建っている。文学館に入った正面には、大きなガラス越しに山々が見える中、「猛烈な天」という一篇の詩がガラスに透かせて書か

れていた。この日は午後から草野心平と交友が深く、この記念館の名誉館長を務めている粟津則夫氏の講演会が開かれる日であったが、私たちは午前中に見学したのでその話は聞くことが出来なかった。

草野心平と言えばその創作において「蛙」を主題にしたことで知られていて、「蛙の詩人」とも呼ばれることがあった。

常設展示の中には、草野心平自身の肉声による自作詩の朗読が聴けるコーナーもあり、そこからは、

遠い深い重たい底から  
暗い見えない涯のない過去から  
づづづづ ーる

づづづづ づわーる  
ぐんうん うわーる

黒い海はどどろきつづける  
黒のなかに鉛色の波がうまれ。  
鉛色のたてがみをしぶかせて波  
はくすれ。

しめつばい渚に腹ばつてくる。  
鉛の波は向うにも生まれ。  
そして黒汁色に吞まれてしま  
う。

けれどもまた現われて押よせて  
くる。

そんな詩の一篇が聞こえてきた。  
こんな心平の生の声を聞くことが  
できたのは大変貴重な体験であつ  
た。

このように草野心平は独特のオノ  
マトベで表現したものを詩に詠んで  
いるが、既存のありふれたオノマト  
ペを越えた自分なりの表現を得るこ  
とで、新しい詩を創り出した詩人な  
のである。

私たち俳人も決まりきった陳腐に  
おちいりがちのオノマトベではな  
く、もっと擬音をしっかりと受け止  
めて、イメージを拡げた豊かな言語  
感覚を磨かなくてはならないと思  
いながら館を後にした。

能村 研三

## 落葉焚く

掃いても掃いても櫛や桜、紅葉の葉が舞ってくる。落ち葉焚の季節であるが、焚いている様子は何処にもなく、子供が居れば焼き芋でもと思うが声もしない。昔は、落ち葉を焚いていると、何処からともなく子供達が寄って来て、葉っぱの小山が燃えてゆく様を、しゃがみながらじいっと見つめていることがよくあった。

そんな景を〈落葉焚みな手をかざしみな寂し〉と詠んだことがあったが、登四郎先生には、〈落葉焚く煙の中の波郷墓碑〉や〈はつふゆの何のけむりか泪ぐむ〉といった御句がある。先生の詠まれるこうしたしみじみとした大人の情には比ぶべくもないのであるが、私の拙い句に詠まれた煙の中の子供が、谷内六郎が描いた『週刊新潮』の表紙の絵の中の  
少年に、少しでも似ているようであれば嬉しい。

## 訂正印

## 森岡 正作

無 医 村 に 女 医 来 る 噂 秋 あ か ね  
後 ろ 向 き に 進 む 保 育 士 豊 の 秋  
悪 友 と 言 は れ て 嬉 し 鬼 や ん ま  
測 量 に 付 か ず 離 れ ず 赤 と ん ぼ  
お け ら 鳴 く 十 年 日 記 の 余 白 か な  
訂 正 印 欲 し き 自 分 史 蚯 蚓 鳴 く  
柿 熟 る る 加 賀 宝 生 の 火 を 蔵 す



はじまりの汚れあり白曼珠沙華 鈴木 光影

曼珠沙華は赤い花が一般的だが、時折姿を見せる白曼珠沙華。夕方、闇に浮く姿は何か妖しく感じられ、幽霊花ともいわれたりもする。遠くから見ると透き通るような真っ白な色が特徴だが、作者は咲き始めたばかりの白曼珠沙華をつぶさに観察した。赤い曼珠沙華であればその観察力も鈍るが、めずらしい白曼珠沙華だからこそ、咲き始めのくすんだ汚れを感じた。

古本の書込みも読み夜半の秋 川高郷之助

書き込みなどのある古本は「キズ物」のように思われがちだが、前の持ち主はどんな人であったかわからないものの、その書き込みを読むと人柄までがわかってきて、単なる読書の楽しみに加えて、一つの本を通して他の読者の所感までを読み取ることが出来る。

愛着も執着も断つ帰燕かな 仲里 貞義

愛着とは、慣れ親しんだ物事に深く心を引かれ、離れがたく感じる事を言い、執着とは、物事に固執しとられることを言う。いずれも人間ならではの感情で、燕には恐らくそうした感情はなく、自然の摂理の通りに帰っていく。もしかしたら人間をはるかに越えた感情を持ち備えているのかも知れない。

吾もまた群れの一員いわし雲 矢野美沙子

秋の空に一面に広がる雲で、魚の鱗にも似ていることから、鱗雲ともいう。この雲が見られると鱗の群れがやってくるとも言われる。これを見ている自分も、多くの人間の群れの中の一員にすぎないのだという感慨にふけた。

砂浜の深き轍や晩夏光 小形 博子

七月の終わりから八月の始めにかけての時期、猛暑が続く昨今では中々晩夏という気分になれない。そんな中、秋の気配が感じられる頃の砂浜は、海水浴の客も去り静まりかえっていて、若者が車で走った轍だけが深く跡を残した。

前山のさつと遠のく秋しぐれ 佐川三枝子

時雨は冬の季語だが、東北では秋の終り頃になると早くも時雨になることがある。これを秋しぐれというが、さあつと通り雨のように降り、前山が瞬間的ではあるが白く遠のくように見えた。

# 能村登四郎の軌跡〔16〕

能村 研三

ひとりでに扉とがあき雪の街に出る

『冬の音楽』昭53

「軽やかで無内容の句」と自らが述べている。この年に書いた「類想拒絶の精神」という文章で「本当に価値あるものは、作品が一句の中でいかに自分の精神を払げているかということである。そうした作品は必ず類想のない無垢な作品として多くの人に新鮮な感動を与える」と書いている。登四郎六十七歳、病後の妻の自宅療養が続く中、つかの間の平穏な暮らしに伸び伸びとした明るい気分の時を過ごした時期でもあった。句集名となった「冬の音楽」という名にもこの時の心境が窺える。

冬いちばん寒き日ならむ職を辞す

『冬の音楽』昭53

前書に「四十年勤務の職なりし」。昭和五十三年の歳末、年度の途中であったが、昭和十四年から四十年奉職した市川学園に辞表を提出した。持病の胃潰瘍が時折起こり入退院を繰り返しつつ、妻の看病を続けるという暮らしであった。教師としても数年間教頭職を務めるなど自ら一生懸命にやり通した満足感があったであろう。教員時代、ふとしたきっかけで始めた俳句が多忙を極める時期でもあり、二足の草鞋から解放されたことで登四郎にとっても愁眉を開くことが出来た。

すこしくは霞を吸つて生きてをり

『天上華』昭56

句集『天上華』の壁頭より五句目に収められた句。二年前に教職から退き専門俳人としての生活を送るようになったが、古稀を迎え老境の域を垣間見るようになったのだろうか。「霞を吸つて生きる」と言うのは俗の世界から超脱したような生きざまのたとえを言うが、小康状態の妻とともに自らも病の不安を抱えていた。そんな時だからこそ、いっさいの欲望を捨てて羽化登仙の思いで、俳句に明け暮れる覚悟が頭を掠めたのかも知れない。

春の夜の夢の浮橋耕二佇つ

『天上華』昭56

昭和五十五年十二月四日、福永耕二が四十二歳の若さで急逝した。登四郎にとつてショックなことで、〈言なくて凍る夜をただ立ち尽くす〉〈豊頬や若さを余す寒の死者〉〈耕二ぼろぼろもつとも嫌ひし冬を逝けり〉という句を作っている。句集『冬の音楽』の後記でも「私のよき後輩として育てた福永耕二の突然の死に遭った。その前途に大きな期待をもった作家だけに痛恨が今も疼いている」と述べている。思えば、昭和三十九年、登四郎が鹿児島に旅をしたのがきっかけで耕二が上京することになり、その人生を変えてしまったことへの悔みもあったようだ。



# 蒼茫集



空想は 栗原公子

ゆきずり

松井志津子

星月夜おのれに倦むといふことも

\*空想は自在な遊び鳥渡る

青みかん言つておかねばならぬこと

鶏頭の花の肉厚日暮くる

虫時雨ふさぎの虫もまぜてやろ

タツチして物買ふ暮し色鳥来

いわし雲 菅谷たけし

十月桜

高橋あさの

\*いわし雲こころの波は口にせず

殿様の像立つ広場色鳥来

蟋蟀の力惜しまず闇を裂く

秋夕焼山なき総の空一枚

黒葡萄一粒づつに魔女の種

一本気蕊まで通す曼珠沙華

名を知らぬ小花を愛でて野路の秋

蓑虫のこ糸聞く小耳こそばゆし

\*風に咲くまこと十月桜かな

近道の思はぬ仲間ゐのこづち

武士の貌して蠶螂枯れきざす

雨あがりとみに艶増す椿の実

やれやれ 千田百里

天高しやれやれ夫の反抗期

\*身に入むや茶渋のやうに添うて来て

二里と言ひふた駅と言ふ花野まで

骨抜きといふは鯖雲・鯛雲

菊坂の質屋が塾に竜淵に

いせ辰の小物に藍の深む秋

だんまり 大川ゆかり

海見ゆる硝子工房九月来る

鍵付きのワインセラーや星流れ

\*鶏頭のどれもだんまり通しをり

秋深し呉須唐草の赤絵皿

秋夕焼三角野球まだ続き

山粧ふトロッコ列車の赤き屋根

アイデンティティー 能美昌二郎

虫の闇村は大きな耳となる

\*葡萄房一粒づつのアイデンティティー

渦潮の真上帰燕の空広げ

鯛雲空にたつぷり鱗撒く

次々と釣針仕込み鯨日和

雨雲を追ひ払ひたる威銃

胡桃割る

河口仁志

胡桃割る忘れ難きは人の恩

手賀沼を雁啼き渡る直哉の忌

産気づく牛に呼ばるる星月夜

\*細々と生き大胆に枯蠶螂

柘榴挽ぐ掌に完熟の重さかな

明日へ継ぐいのちの祈り秋の蟬

露払ひ

瀧上千津

師の露払ひ勤めし頃の秋旅恋ふ

曼珠沙華魂住む山の裾に燃ゆ

\*稲光老いの身ぬちの何か裂け

介護3・露の長寿に日課あり

深秋の遺品の隅に利休下駄

淋しさ言はず白曼珠沙華ゆれもせで

# 潮鳴集



ひややか

兵藤 恵

ひややかに点す白色蛍光灯  
括り紐ぶつんと萩を放ちけり  
浮世 絵の男驚く稲光  
\* 差し水の沸く台風の予報円  
さみしさの集まつてゐる貝割菜

灯 台

埴 誠 一 郎

灯台の照る日曇る日鳥渡る  
蜻蛉の空へ楢円の球を蹴る  
枯野碑のほとり色鳥来てをりぬ  
安達太良のほんたうの空鳥渡る  
\* 野分晴れ夕鐘とどく聖橋

秋 草

齊 藤 實

雁渡し戻りて来たる遺失物  
\* 最後まで話は聞けと法師蟬  
秋草のしやんとする奴しない奴  
コンビニの明り煌々無月かな  
一週間前の約束紅葉狩

草の絮

大 矢 恒 彦

いにしへの歌垣蓮の実の飛んで  
老年を弾けてみだし鳳仙花  
\* 草の絮夕日の先へ飛ぶつもり  
予報士の眼のきらきらと台風来  
数式は宇宙のことば銀河濃し

## 沖 作 品



## 能 村 研 三 選

身に入むや万年筆の筆記音

東 京

鈴木 光影

息ふかくして秋蝶のひらくなり

東 京

鈴木 光影

\* はじまりの汚れあり白曼珠沙華

東 京

鈴木 光影

朝顔のはだへに白き夜明け来る

東 京

鈴木 光影

昼と夜のはひの刻よ合歡の花

東 京

鈴木 光影

秋の宵宴席てふに手酌ぐせ

埼 玉

川高郷之助

晩秋の礼服に吾の旧名刺

埼 玉

川高郷之助

スタートの静止一瞬運動会

埼 玉

川高郷之助

深秋や古書驛の客の賢者めき

埼 玉

川高郷之助

\* 古本の書込みも読み夜半の秋

埼 玉

川高郷之助

愛着も執着も断つ帰燕かな

埼 玉

川高郷之助

\* 満月や都会は矩形ばかりなる

埼 玉

川高郷之助

電気とふあるはずのもの蚯蚓鳴く

埼 玉

川高郷之助

したたかといふも小癩や稲雀

埼 玉

川高郷之助

杉玉や家に海鼠腸あつたはず

埼 玉

川高郷之助

\* 吾もまた群れの一員いわし雲

市 川 市

矢野美沙子

角いくつ曲りてもなほ今日の月

市 川 市

矢野美沙子

姥捨の夜は漆黒今日の月

市 川 市

矢野美沙子

もの思ふことの多かり乱れ萩

市 川 市

矢野美沙子

金木犀風の抜け道知りつくす

千 葉

小形 博子

\* 砂浜の深き轍や晩夏光

千 葉

小形 博子

信号機の捌く人の世白露かな

千 葉

小形 博子

秋燈や影のぐらりと平家琵琶

千 葉

小形 博子

薪積みし軒より木の香ちちる虫

千 葉

小形 博子

航跡の綾なす港初時雨

福 島

佐川三枝子

来年は知らず蔵王の月今宵

福 島

佐川三枝子

秋澄むや栗鼠のさ走る山毛櫨林

福 島

佐川三枝子

暁闇やこつと青柿落ちる音

福 島

佐川三枝子

\* 読み返す丘の墓碑銘昼の虫

福 島

佐川三枝子

前山のさつと遠のく秋しぐれ

福 島

佐川三枝子